

ダフネの末裔

佐藤義隆

文学部文化情報メディア学科

(2003年9月11日受理)

A Descendant of Daphne

Faculty of Humanities, Department of Humanities and Information,
Major in Cultural Studies and Information,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu City, Japan (〒501 - 2592)

SATO Yoshitaka

(Received September 11, 2003)

1. はじめに

1950年にロンドンに生まれたサラ・メイトランド (Sara Maitland) が1993年に出版した短編集、『女は男が見ていない時に飛ぶ』(*Women Fly When Men Aren't Watching*) に収められた短編に、「ダフネ」(“Daphne”)がある。「Daphne」には「ダブネ」と「ダフネ」という二つのカタカナ表記があるが、「ダブネ」はギリシャ語読み、「ダフネ」は英語読みである。ここでは英語読みの表記を使う。メイトランドの短編小説「ダフネ」は、ダフネという自分の名前を嫌う娘に、母がその名の由来となったギリシャ神話のダフネのエピソードを語って聞かせるという設定になっている。太陽神アポロに求愛され、これを拒んで逃げた美しいニンフのダフネは、追い詰められて月桂樹(ギリシャ語で Daphne, 英語で Laurel)に変身する。ギリシャ神話では、ダフネが助けを求めるのは父である河の神にであるが、この作品では母である大地の女神になっている。そこに作家の意図がある。また生前母がダフネの神話を語ってくれた時も、今一つ釈然としなかった主人公の「私」が、母の死後偶然見つけたアンドリュー・マーヴェルの詩「庭」を読むことによって、前よりは理解できるようになり、自分の名前に誇りを持ち庭に月桂樹を植えるようになるというのが最終結末である。母が「私」に「ダフネ」という名前をつけたその深い意味を「私」が長い時間をかけて理解していったように、本論文も作品を分析しながら関連する事柄にも触れ、理解を深めて、サラ・メイトランドの意図を明らかにしたい。

2. 月桂樹の思い出と「私」の名前の由来

サラ・メイトランドの「ダフネ」は主人公「私」の月桂樹に関する思い出から始まる。「私」が子供の頃住んでいた家には月桂樹が何本か植えてあったが、「私」にはそれらが地味で退屈なものに見えて、華やかなシャクナゲやツツジやバラの方が好きだったこと。しかし、大人になり、子供もある現在は、バラが中心の自分の庭に、好きな植物として月桂樹も植えてあるこ

と等を語る。「私」が二才の時に父が家を出ていった時、母はスコットランド南西部のギャロウエイ (Galloway) にある、みずばらしいけど美しい家に引っ越したが、そこにはみずばらしいけど美しい庭があったからだった。ギャロウエイは牛馬の名産地として有名だが、このあたりはカリブ海から北東へ、暖かいメキシコ湾流が絶え間なく流れてきて、アイルランドの北岸あたりから流れを変えてソルウエイ湾 (Solway Firth) まで流れ込んでくるせいで、不思議な程温暖な気候であり、霜が降りることもない。こうした気候がエデンの園のような庭を作るのに貢献するのであり、彼女の庭はまさにそうした条件の中にあったのである。そこまで庭に拘った母。そうした拘りはどこからくるのだろうか。読み進めていくと、「木よりも美しい女性はいない」という母の発言を聞くことになり、その庭や木に対する思い入れの深さが尋常ではないことがわかってくるのだが、それはまたあとで触れることにする。

母が「私」にギリシャ神話のダフネの話をしてくれたのは、「私」が10才か11才の時だった。「私」がまた「私」の名前について不満を漏らしたからだった。

“Daphne! Mummy, how could you?”

「お母さん、どうしてダフネなんて名前にしたの？」

“I think it’s a lovely name, what’s wrong with it?”

「美しい名前でしょ。どこが悪いの？」

“It’s an old lady name.”

「年をとった婦人の名前みたいだわ」

“Are you an old lady?”

「あなたは年をとった婦人なの？」

Pause

沈黙

“Well then. You are not an old lady. Daphne is your name. So, ‘Daphne’ is not an old lady name.”

「じゃああなたは年をとった婦人じゃないわ。ダフネがあなたの名前よ。

だから「ダフネ」は年をとった婦人の名前じゃないわ」

“Oh Mummy.”

「まあ、お母さんたら」

詭弁を弄してまで娘を納得させようとする母に娘は呆れてしまっている。要するに「私」は自分の名前が大昔の物語に出てくるような時代があった名前のように嫌っていて、どうしてそういう名前にしたのかを聞きたいのである。「私」には現在子供達もいて、その子供達も自分達の母親の名前が気に入っていない。「私」自身自分の名前が気に入っていないのだからその思いが子供達に反映されても仕方ないことである。

「私」が母と親子喧嘩するといつも母は台所のテーブルのところへ行き、「私」に背を向けて話しをするのが常だった。「私」が名前のもので不満を言った時も、母は台所のテーブルのところへ行って、「私」がもっと年をとったらこの名前が好きになると思うよと言った。「私」の名前はとても特別な人に因んでつけた名前だと母は言った。「私」の名前には特別な思いがこめられているというのである。多かれ少なかれ、命名には思いがこめられる。子供に名前が

つけられる時、子供は生まれるとすぐ呪いを受けるという言い方がされることがある。名前という呪いを受けるのである。呪いという言葉をも呪文とか願いに置き換えると、名前には親の呪文、願いがこめられることになる。日本だったら美しい子になってほしいという呪文や願いから多美子とつけられたり、徳のある子に育て欲しいという願いを込めて徳子とつけたりする。欧米だったら聖書にでてくる聖人や聖女に因んで John や Elizabeth という名前が多いという。沢山ある女性の名前の中から、母が自分の娘に選んだ名前は「ダフネ」だった。その名前に託された思いを伝えるために母はギリシャ神話のダフネの話しを始める。

3. 母の語るダフネの物語

母は素晴らしいストーリーテラーで、話し方が独特だった。台所仕事や庭仕事など、何か仕事をしながら、しかも人を見ずに語り、自分自身の楽しみのために語っているようであり、皆の物語にもなっているといった語り方だった。彼女は次のように語り始めた。

She was a nymph, the first Daphne, an immortal.

「最初のダフネはニンフでイモータルだった」

「最初の」とつけたのは、その後彼女にあやかってつけられたダフネという名の女性は何人もいて、「私」もその一人で、いわば「私」は「ダフネの末裔」の一人ということになるのだが、その大本の最初のダフネという意味でつけられたものである。nymph というのは、海・川・泉・山・森などに住む半神半人の少女のことである。immortal は “a person who has an eternal life”(永遠の命を持った人間) のことである。古代ギリシャ人はそういうものの存在を信じていた。色々なものをごちゃまぜにして考えるのが古代ギリシャ人の特徴で、美しい人間の中にも神を見だし、神々しい神の中にも人間を見た。gods and humans だけでなく、その中間の immortals という存在も考え、そして常にそれぞれへの変身が可能と考えた。

ダフネの父は河の神ラドン (Ladon) で、母は大地の女神テルス (Tellus) だった。テルスはローマ神話の名前で、ギリシャ神話ではガイア (Gaea) にあたる。『ギリシャ・ローマ神話辞典』には父はアルカディアのラドン河神、あるいはテッサリアのペーネイオス河神となっているが、ギリシャ神話は各地の神話が統合されていく過程で、主な地方の神話が幾つか採用されて、こうした複数の出自説が書いてあるのがよく見られる。しかし、母のことは『ギリシャ・ローマ神話辞典』にも書いてないし、ギリシャ神話を扱った多くの本にも書いてない。にもかかわらず女性がダフネのことを取り上げる時は母との絆が強調される。メイトランドの「ダフネ」もそうだし、ドリス・ゲイツ (Doris Gates) の *Tales from the Greek Myths* (『ギリシャ神話の物語』) もそうである。そのことを少し考えてみよう。

ギリシャ神話は、紀元前6千年から紀元前千五百年にかけての長い間に、小アジアから移住した、あるいは北方から南下した異民族がもたらした異宗教、異文化が、先住民の信仰する土着の神々と混合、融合し、変化消長して出来上がったもので、紀元前八世紀にはホメロスによって整理・統一され、ギリシャ神話の根幹となる二大叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』となってまとめられた。しかし、同じく紀元前八世紀に生まれたヘシオドスになると、神話の整理・統一の仕方に変化が起こってくる。ホメロスではゼウスが正義そのものに関心を示したり、道徳の掟を実現するような行動を直接とることはあまりないが、ヘシオドスになるとゼウ

スは正義を行なう神として登場する。ヘシオドス書いた『神統記』では、宇宙の生成からオリンポスの主神ゼウスによって世界が正しく構築され統治されるまでが、神々の系譜と役割という枠組の中で語られている。かってガイア(大地)はウラノス(天)を産み、そのウラノスと交わって多くの神々を産んだ。その中のクロノスとレアが両親となってゼウスが生まれた。ゼウスは父クロノスを倒し、宇宙の支配者となった。『神統記』におけるゼウスの系譜の要約だが、ここでいわれていることは、母なる神を讃えながら、その母なる神から父なる神への世代交代を明確にうたっていることである。

生殖の科学に無知であった時代は、女は生命を産む神秘的な、根源的な力として畏れられ、崇拜されたが、男が介在しない生殖がないことを知ってからは、社会全体が男性中心主義へ向かった。ヘシオドスはそうした時代背景の中から、父権の確立をうたう男性中心で女性蔑視の神話に組み替えていったのである。例えば、最初の女性パンドラが、ゼウスが人間を罰するために与えた女として描かれているのがその一例である。好奇心が強く、美しいが故に男の心を惑わす不実の存在として描かれている。一方、生産性と知恵を持つ母なる女性はヘシオドスにとっても偉大な存在であるため、母なる神からの自立をうたいながらも、思慕するという、意識の二重構造が見られ、これがギリシャ文化の二重構造といわれるものの根幹となっているのである。

ダフネの母のことが『ギリシャ・ローマ神話辞典』やギリシャ神話を扱った多くの本に書かれていないのは、こうした意識を反映したものと思われる。しかし、ドリス・ゲイツやサラ・メイトランドのような女性がダフネのことを扱った時にダフネの母のことに触れるのは、そうした不当な扱いに対する女性側からの抗議が込められているからだと思われる。因みに、Dorisという女性名もギリシャ神話系の名前で、太陽神オケアノスの娘で、海神ネレウスの妻の名前でもある。

サラ・メイトランドは、「私」の母に、ダフネがテルスの娘であったことに力点を置いて語らせている。テルスは最も古い神で、全てのものを育み、オリンポスの三兄弟(ゼウス、ポセイドン、プルート)が世界を支配するようになってからも、彼女だけは滅ぼすことができず、全ての神々の母という存在であり続けていると語られている。ダフネは母の子守歌を聞いて育った。母の子守歌を聞くと、夜の中に色々なものが育っていった。眠りから覚めると、河の神である父が、朝の歌を聞かせてくれる。河の流れの音を聞き、母である大地の女神によって作り出される豊かな作物や木々や草花が育つを見ながら、自分自身も育っていく喜びを感じながらダフネは毎日を送っていた。だからダフネは、血統書つきの自然児であったといえる。そうした環境で育つダフネは、美しく、健康で、髪もつやつやと黒く輝やいている。そういう彼女をアポロは欲した。

4. アポロの女性蔑視と傲慢さ

アポロにとって女性は性的冒険の対象以外の何ものでもないという女性蔑視丸出しの姿でアポロは語られている。また彼は大変傲慢な神であることが強く印象づけられている。神である私が人間の女であるお前を愛してやるのだからありがたく思え、といった感じである。自分の寛大さとダフネの好運のことを考えながらアポロはダフネを狩りにやってくる。母ギツネが三

匹の子ギツネに最初の狩りのレッスンをしているところをダフネが息を潜めて見守っているところへアポロはやってくる。その場面で彼は無神経にもハーブを奏で、ダフネの気を引こうとする。彼女は彼の方を見ることなく「シー！」と怒ったように言った。このことが彼のプライドを傷つけ、彼は逆恨みで逆に怒りを感じる。キツネ達は素早く木立の中へ消えていった。それから男の方を振り向いたダフネの目には、その男が神ではなく、彼女の友達の邪魔をした騒々しくて無礼な若い男に見えた。

もっと敏感な若者だったら、これは幸先のよい始まりではないと気づいたはずだが、叶わぬことのない神であるアポロには、感受性と謙虚さが欠けていたため、しつこく何度も彼女を口説く。最後に彼女が木立全てに聞こえるように“*No, thank you.*”「結構です」と言った時、さすがの彼でさえも、これは少女らしい憤ましさではないのだとわかった。さすがの彼でさえもこれが売春婦のわざとらしい恥ずかしがりであるとか、このNoはYesの意味だとか、最悪でも多分という意味であるとか、そういったふうに彼自身に納得させることが最早でできなかった。これは彼の自己愛的な耳にさえも、そういうことには全く興味のない女性の純然たるNoであるとわかった。彼はまごつき気まづい思いをした。そして辱めを受けたので、怒りの感情がこみあげてきた。彼の怒りは、期待する権利を持っていると考えていた楽しみを拒まれた、甘やかされた子供の癩癩だった。彼は顔を歪ませながらも微笑んでいった。“*I never take ‘no’ for an answer.*”「私には誰にもNoとは言わせない！」“*How inconvenient for you,*”「不便なお方」と彼女も応じたが、彼の目の中に見たものに本能的恐怖を感じて、彼女は走って逃げだす。これからアポロによるダフネのチェイスが始まるが、その前にアポロ像の変遷の歴史を概観してみよう。

アポロは生粋のギリシャの神ではない。紀元前八世紀にホメロスによって整理・統一された『イリアス』と『オデュッセイア』では、外来神の要素の強い神であり、ギリシャの民族神ではなかった。アポロが、理想美の追求と高邁な精神を尊重するギリシャ文化を象徴する神としてのイメージが固定するのはヘレニズム（紀元前四世紀末）に入ってからである。『イリアス』や『オデュッセイア』に登場するアポロは、暗く、恐ろしい神としてである。『イリアス』では、恐ろしい疾病の矢を放ち、終始一貫してトロイア方に味方して、ギリシャ方には残忍で酷薄な仕打ちをする。『オデュッセイア』では、妻である愛と美の女神アフロディテが軍神アレスと情事に耽っているのを知った夫の鍛冶の神ヘパイストスの苦しみをよそに、アフロディテほどの美女とならば自分もアレスにあやかってみいたいなどと言って、粗野な一面をのぞかせている。紀元前五世紀、古典ギリシャの黄金時代になると、アポロは専ら神託の神として描かれる。しかし、ここでのアポロも知性と秩序を司る明晰なアポロ像とは違って、苛酷な神託を下す暗い神である。例えば、アイスキュロス三部作『オレスティア』の第三部「慈しみの女神達」では、「母は胎内に宿る種を育てるものにすぎず、子をもうけるのは父である。父の敵である母を討つのは正義である」といってオレステスを擁護する。西欧文明の基底にある男根中心主義の端緒がここに見られる。日本でいうところの「借り腹」思想で、紀元前五世紀はギリシャで女性達が最も厳しく抑圧され、両性の分極化が最も進んだ時代であったという。

メイトランドの「ダフネ」に登場するアポロは、ヘレニズム以降の光明と理性の理想的な神ではなく、『オデュッセイア』に見られる粗野な面、『オレスティア』に見られる女性蔑視の面

が強調されていることがわかる。メイトランドは「私」の母に、逃げるダフネの恐怖心を執拗に語らせている。そしてアポロの手がダフネに伸びた時、ダフネは大声で「お母さん！」と叫ぶ。普通のギリシャ神話の本では、父である河の神に助けを求めるのが一般的であるが、母である大地の女神テルスとの絆の強さを示すために、メイトランドは母に助けを求める設定にしている。そしてダフネの体が月桂樹に変わっていく過程を、メイトランドは生物学用語を駆使して事細かに語らせていく。こうした描写の仕方はギリシャ神話のどの本にも見られないメイトランド独自のものである。

5. ギリシャ神話の奥深さ

ダフネを追うアポロの話を通して、ギリシャ神話における女性蔑視の現実を垣間見ることができたが、ダフネに焦点を当てて見てみると、ギリシャ神話にはもう一つの女性観も描かれていることがわかる。アポロが言った、女は性的冒険の対象以外の何物でもない、といった女性蔑視とは違って、ダフネの中には男性中心の世界観に反発する女性像が描かれている。父との絆を前面に出しているダフネの神話では、父の河の神が、早く結婚して孫の顔を見せてくれとダフネにせがむと、自分はアルテミス様と同様に男を避けて、狩りをして一生を送りたいと希望をいう。この父の言葉も、女は結婚して子供を育てるのが一番といった、男性中心の世界観を述べたものである。一方ダフネの方は、結婚すれば夫に縛られ、家庭に縛られ、自然児として自由に生きることができなくなるので、それよりは自由に生きることを選択したことになり、ダフネの行為はフェミニズムの原点のようなものになっている。ギリシャ神話にはこうした目覚めた女性達の話も多くあって、ギリシャ神話の奥の深さを感じさせてくれる。例えば、紀元前五世紀に書かれたソポクレスの『アンティゴネ』は、禁制を犯して、野ざらしにされた兄の遺体を一人で埋葬し、生き埋めの刑を受けるアンティゴネの話である。自分の信じるところに従って行動する理性と勇気の女性が既に描かれていたのである。ダフネの理不尽なものを断固として拒む姿勢やアンティゴネの気高さや強さは、人間にある愚かしさや弱さの把握とともに、人間性を重層的に捕らえたものとして見ることができる。人間の中にはありとあらゆるものがあるという人間性の重層性の把握がギリシャ神話の特徴といえる。これは後に後世の人々が、人間主義 (humanism) と讃えるギリシャ精神の根幹をなすものである。女性上位も、女性蔑視も、男女平等も、人間世界に関する全てがある。これらが「ギリシャ神話」の大きな特徴なのである。

6. 母の不可解な言葉

アポロの不出来も、ダフネの断固とした拒否も、そうした視点から見ると、本当によくギリシャ神話の特徴が出ているといえる。そして母が「私」に「ダフネ」という名前をつけたのは、ダフネのように自分の主義主張というものをしっかり持って、目覚めた女性として生きてほしいという母の願いが込められていると一応は読めるのだが、サラ・メイトランドの「ダフネ」ではもうひとひねりしてある。それはダフネの神話を母が語り終えた後の二人の会話に示されている。母はペーストリーの仕込みをしながらダフネの話を終えた。「私」は母に尋ねた。

“Did her mother turn her into a laurel bush for ever?”

「彼女の母は彼女を永久に月桂樹の木に変えたの？」

“Oh yes.”

「ええ、そうよ」

“Poor Daphne.”

「かわいそうなダフネ」

“On the contrary,” said my mother with a smile, “I think that I will never see a woman lovelier than a tree.”

「かわいそうどころか、木よりも美しい女性はいないわ」と母は微笑んで言った。

“What ? I don't understand.”

「何ですって。理解できないわ」

“You probably will one day.”

「いつかあなたもわかるわよ」

7. マーヴェルの「庭」

母は「私」が20才の冬に亡くなった。その時もまだ「私」は「木よりも美しい女性はいない」の意味がわからなかった。後に「私」は自分の名前が出てくるアンドリュー・マーヴェル(Andrew Marvell, 1621-78)の「庭」(“The Garden”)という詩を発見し、それを読んで「木よりも美しい女性はいない」の意味が少しわかるようになる。それから「私」は庭に月桂樹の木を植え始め、「私」自身の名前を高く評価するようになったというところでこの作品はおわっている。マーヴェルの「庭」は彼の最高傑作といわれ、川崎寿彦氏も『マーヴェルの庭』という本でこの作品を詳細に分析しておられる。私達も「木よりも美しい女性はいない」という言葉の意味を知るためにマーヴェルの「庭」を見ていこうと思う。

マーヴェルの「庭」は九連からなっていて、第一連では、人間は人間社会であくせくすることをやめて、植物達の中に平安を求めた方がよいことを提案する。スチュアートの『囲われた庭』によれば、日陰の量の豊かさはエデンの至福の状態であり、その乏しさは樂園追放以降の人類の状態を示しているという。アダムが額に汗して労働するのは、草も木も殆どない荒野であり、頭上には神の律法の烈日が燃え盛る怒りとなって照りつけている。彼が憇いを許されるのは、キリストの恩寵によって秘蹟の樹蔭を囲いこんだ教会という庭なのだということで、教会が樹蔭のイメージでとらえられていることがわかる。オースティンの『果樹園の霊的効用』では、神の恩寵こそ、自然のままでは滅びに至るはずの人間を、ちょうど庭師が野性の植物達を選び分けて、囲われた庭に移し、あるいは接木して良き実を結ばせるように、教会という囲われた庭に移植して育成する神のアートなのだと言っている。こうした思想的連想を呼び起こす深さで庭がとらえられ、庭の価値がうたわれている。要するに第一連は読者に、庭の持つ形而上学的意味を提示していることになる。第二連になると、その庭園隠世行為を美德と結びつけ、麗しき静寂と純心は人間社会には発見されず、庭でのみ見いだされるものであり、庭は天上のアイデア界を直接投影したものであり、喧騒と汚濁の地上にあって、唯一の聖別された場所であるとうたう。第三連になると、蔭を作る木々の緑は神の恩寵なのだから、木々の美が女性の美にまさり、人間の女に夢中になるのは愚かなことだという思想が展開される。メイトラン

ドの「ダフネ」の中の「私」の母が「木よりも美しい女性はいない」と言ったのは、この箇所を踏まえて言っていることがわかる。

第四連ではマーヴェルがこうした思想を展開する元は何なのかが示される。それはプラトンの思想によっている。プラトンによれば、性愛の情熱というものは、人間がアンドロギュノス（男女両性具有）的段階を終わって男女に分かれ、増殖の段階に入った時に始まった、逃れることのできない宿命的呪いということである。この呪いを避けてアンドロギュノス性を回復させるには、性愛のできないものに変身するしかない。性愛のできないものの中でも、木は人々に蔭を作る神の恩寵の印だから、木に変身することは人間よりも一段階上の存在になることを意味している。こうしてダフネは月桂樹という木に変身することになるのである。この第四連にダフネという名前が出てくる。

Apollo hunted Daphne so,
Only that She might Laurel grow.
And Pan did after Syrinx speed,
Not as a Nymph, but for a Reed.

アポロがダフネを追ったのもただ彼女を
一本の月桂樹に変身させるため。
パンがシュリンクスを追ったのも
ニンフではなく一本の葦を得るため。

ここに出てくるアポロとパンは傲慢な青年やエロ親爺としてではなく、キリストの予表として描かれている。アポロとダフネ、パンとシュリンクスの関係も視点を180度変えて見ると、このように捉えることができるのだから、何かにつけての私達の日頃の思い込みも常に見直す必要があると思わせてくれるところである。

第五連になると、今までスティックに官能の喜びを忌避している庭が豊かな官能性を持ったものとして描かれているが、その五連の分析は省略して、第六連へ進みたい。第六連は「私」がここを読んで母の言った言葉を理解するようになったところなので全文を分析してみたい。

Mean while the Mind, from pleasure less,
Withdraws into its happiness:
The Mind, that Ocean where each kind
Does streight its own resemblance find;
Yet it creates, transcending these,
Far other Worlds, and other Seas;
Annihilating all that's made
To a green thought in a green Shade.

いっぽう心は劣った快樂からしりぞいて
みずからなる幸せにひたる。心は

あらゆるものがそのなかに自己の同類を
 ただちに見出す大洋なのだが
 しかし心はそれらを越えて
 はるか異なる世界と海を創り出す、
 創られたものすべてを無と化し
 緑の樹蔭の緑の想いに帰しながら。

第六連は心の世界が描かれている。心は劣った快樂に最初は惹かれるが、やがてそれらに虚しさを感じ、精神的快樂へと向かっていく。心は「あらゆるものがそのなかに自己の同類をただちに見出す大洋」のように広大で、「しかし心はそれらを越えてはるか異なる世界と海を創り出す」創造性に満ちている。しかしやがて心は更なる幸せを求めて「創られたものすべてを無と化す」恍惚状態に至り、「緑の樹蔭の緑の想い」に戻っていく。「緑の樹蔭」というのは前にも見たように、エデンの至福の状態の象徴であり、「緑の思想」というのは、スチュアートやオースティンの思想に見たように、緑を通して天上界のことを思うことを意味している。

第七連、八連、九連のことにも触れながら「庭」のことをまとめると次のようになると思う。庭で瞑想することによって、瞑想者の魂は恍惚状態になり、天（イデア界）へ向けての飛翔に備えることになる。庭での恍惚状態は、精神が物質の支配を受けるようになる前の精神優位の状態、イヴが生まれる前のアダムのアンドロギュノス状態に一致する。イヴが創られ、男女による生殖行為が始まった時、人間は個体として死すべきものと定められた。動物界にもメスが誕生したので、同じ運命を歩むことになった。かつてはあらゆる被造物がアンドロギュノス性の至福を神と分けもっていたが、女性、動物のメスの誕生後は、神と植物だけがその至福を味わえることになった。マーヴェルの「庭」は、庭での瞑想を通して、この原初的至福へ回帰することを賛美している詩といえる。

「私」はこの第六連に何を読み取ったのだろうか。人間の心は広大で創造性に満ちている。そうした広大で創造性に満ちた心の命じるままに人間は生きているが、それだけでは人間の心は満たされない。心を無にしてその先に見えてくるものこそ真の心の幸福なのではなからうか。こういうことを「私」は感じ取ったのだと思う。要するに「私」は、この第六連を読んで、発想の転換ができるようになったのだと思う。それまでは発想の転換がなかったために、同じところをぐるぐる回っていて一皮剥けずにいたところへ、マーヴェルの詩が青天の霹靂のように彼女の心の琴線に触れたということだと思う。

8. 終わりに

ダフネの末裔である「私」は、母の語るダフネの神話と、アンドリュー・マーヴェルの「庭」という詩から二つのことを学んだと思う。一つは男性中心の世界観に反発する女性の強さであり、もう一つは、ダフネの月桂樹への変身は、一つ上の次元への移行であり、人間という呪われた存在から抜け出したことを意味しているということであった。そういう視点が得られたので、母が言った「木よりも美しい女性はいない」という言葉もやっと理解できたわけであるが、それにはマーヴェルの詩の助けがあったればこそだった。マーヴェルの詩が青天の霹靂となって、

発想の転換ができたからだった。

作者のサラ・メイトランドは、オックスフォード大学で英文学を専攻し、英国国教会の牧師の妻として、教会の内側からキリスト教における女性の問題についてエッセイや小説や評論を書いてきた。1978年には、現代女性の目から聖書の物語を読み直した最初の長編小説 *Daughter of Jerusalem* でサマセット・モーム賞を受賞している。「ダフネ」という彼女の短編小説も、彼女の長年にわたる女性の問題の見直し作業の一つとして読めるのだが、この作品ではダフネがマーヴェルやその背後にあるプラトンまで持ち出して、形而上学的視点で見直されていることが新鮮な切り口としていつまでも記憶に残る。私もこの作品を読んでから木に対する考え方が変わった。これからは木のそばを通ったら木に敬意を表わそうと思う。

参考文献

1. 山内照子・宮澤邦子編 『現代英米短篇集』, 三修社, 1996
2. 新井明・新倉俊一・丹羽隆子編 『ギリシャ神話と英米文化』, 大修館書店, 1991
3. 高津春繁著 『ギリシャ・ローマ神話辞典』, 岩波書店, 1960
4. T・ブルフィンチ著 『ギリシャ神話と英雄伝説』, 上下, 講談社, 1995
5. Doris Gates, *Tales from the Greek Myths*, Asahi Press, 1986
6. Richard Goodman, *Classic Tales From Greek And Roman Mythology*, Kinseido, 1980
7. H. R. ジョリッフ著 『ギリシャ悲劇物語』, 白水社, 1964
8. 川崎寿彦著 『マーヴェルの庭』, 研究社, 1974
9. 川崎寿彦著 『庭のイングランド』, 名古屋大学出版会, 1983